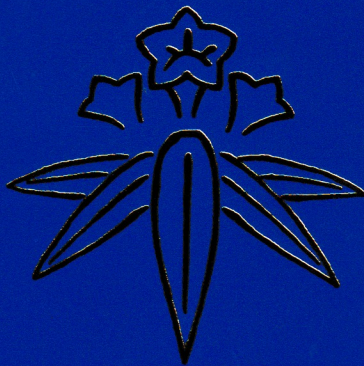


— 50年記念 —

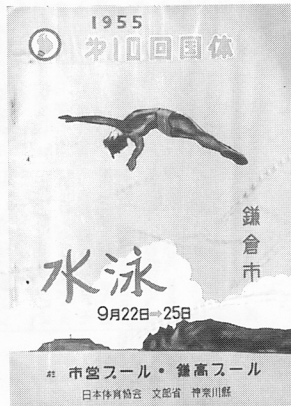
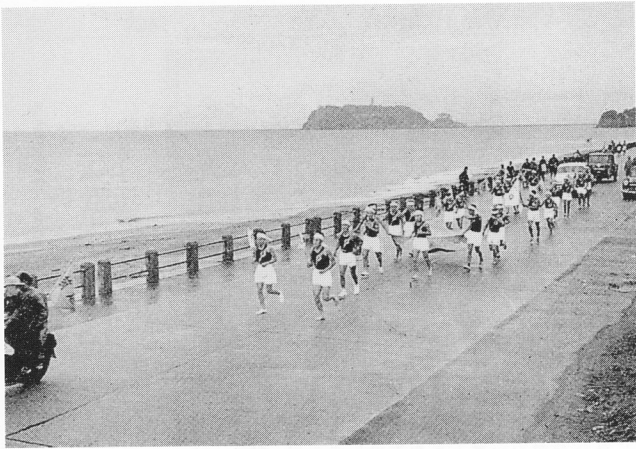
# スポーツの歩み



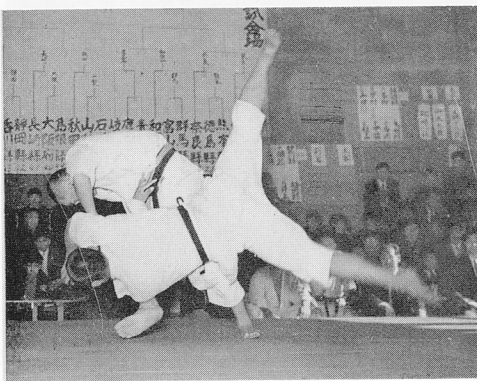
鎌倉市体育協会



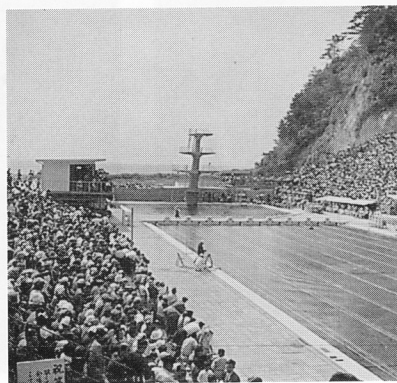
第10回国民体育大会（鎌倉会場）



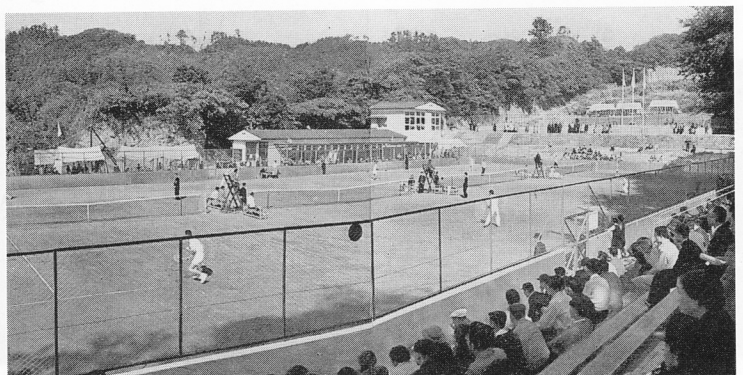
水泳



柔道



弓道



硬式テニス

# 鎌倉柔道協会

昭和28年(1953)体協設立当初より加盟

|     |    |    |
|-----|----|----|
| 会長  | 宮地 | 豊  |
| 副会長 | 田代 | 弘隆 |
|     | 吉田 | 元久 |
| 理事長 | 塩見 | 眞彦 |
| 監事  | 高橋 | 行雄 |
|     | 又吉 | 昌英 |

記録をたどると、鎌倉で柔道大会が催された最初は、明治43年(1910)か、もう少し前だということが推測できる。そして、大正9年(1920)までの10年間の全ての大会が「鎌倉師範で挙行」とある。

鎌倉師範学校(神奈川師範の通称。横浜国立大学の前身。)が、県下の中等学校に対して、強く柔道を推奨し、発展に寄与しようと努めていたことが窺える。

鎌倉警察署の道場「振武館」が、これに対し、私的な町道場的な役割を果たしていた。

春藤春光氏はクリーニング業のかたわら、師範学校の学生や、警察署員と一汗流して、段々と力をつけ、後には、認められて振武館の師範代を務めるまでになっていた。

この実弟、春藤三男氏が、鎌倉中学校(鎌倉学園の前身)5年の時、昭和14年(1939)東洋大学主催の全国柔道大会で個人最優秀賞を得た。

鎌倉師範も、昭和7年(1942)檀原神宮で行われた全国体育大会で決勝に進み、福島師範と2対2のあと、代表戦5回に及び、惜しくも日本一を逸したほどの強さであった。(白井・高橋・長嶋・川名・比企野の5選手)

戦争で中断されていたが、戦後の混乱期である昭和22年(1947)春藤春光氏は、鎌倉柔道倶楽部を設立した。恐らく県下で第1番に柔道場を開設したと思われる。連合軍の占領下にあるので、極めて難しいはずであった。

鎌倉柔道倶楽部の歴史から述べると、初代会長

蔵並長勝氏、2代山本義雄氏、3代野田武夫氏、4代野田毅氏、5代大崎六郎氏、6代根本一三氏である。

それまでは、鎌倉柔道倶楽部イコール鎌倉柔道協会であったが、昭和37年(1962)大船中学校に柔道部が設立されると翌昭和38年1月に鎌倉柔道協会を設立。初代会長は野田武夫氏。

2代榎本義信氏。3代坂巻与助氏、4代根本一三氏、5代宮地豊氏と受け継がれ、現在に至っている。

鎌倉には[鶴岡八幡宮奉納柔道大会]、[大塔宮鎌倉宮奉納柔道大会]、[こどもの日]の[県下少年柔道大会]に加えて、大船中学校の体育館が会場の、[神奈川県中学校柔道大会(新人戦)](注)など、県内、あるいは近隣市町から人が集まる、特大の大会が多い。この他にも、[市民柔道大会]や中学校の各種大会があり、一年中多忙を極めている。

(注)鎌倉武道館の設立で、会場はこちらに移った。

昭和45年(1970)3月、宮地豊氏が齋藤次郎師範に勧められて、大船に柔道場を設立、宮地商事柔道会(初代会長宮地戸三郎氏)と称し、社員及び地域の青少年に道場を提供、育成に貢献した。

昭和47年(1972)大船柔道クラブ(会長宮地豊氏)と名を改めた。鎌倉柔道クラブと対をなし、協会はますます安泰となった。

中学校は、御成、腰越、付属などに、既に柔道部があったが、指導者の異動や施設等の関係で、



[写真] 昭和45年(1970) 2月大船中学が第3回県中学校柔道大会(新人戦)で優勝した時のもの。

[後列左から]鈴木浩二、又吉昌英(顧問)、田代弘隆(顧問)、井上省吾校長、村松茂、飯島哲郎(顧問)

[前列]日沼和久、松永隆、和田晃、森田仁(略敬称)

次々と廃部になり、昭和40年(1965)ころには、大船中学校だけとなった。

昭和55年(1980)4月、玉縄中学校に、同9月、腰越中学校に、翌56年4月、岩瀬中学校にと、続々柔道部が誕生した。玉縄中と岩瀬中は、大船中から分離開校した学校であることと、腰越中には大船中の柔道指導者が異動したことが主たる要因である。

鎌倉柔道倶楽部で矢込俊彦師範、青木政雄師範や一柳道男氏らのもとで育った田代弘隆が、横浜国立大学に進み、昭和27年(1952)、大先輩の近藤音次郎氏の力を借りて、大学の柔道部を再興した。

大船中学校に勤めて、昭和37年(1962)、又吉昌英、飯島哲朗、須田節子氏らと図り、大船警察署の道場(現在の大船体育館の所)を借りて柔道部を設立した。

翌昭和38年(1963)夏、第6回県中学校柔道大会で、大船中学校は初出場で優勝した。(選手:渡邊修、的場保幸、一戸隆男、熊田幸一郎、林次男)

以後も準決勝以上に何度も進み、名門校に名を連ねるようになった。

鎌倉学園の齋藤次郎師範が、国体選手の安齋悦雄選手らを従えて、強力な後盾となっていたのだが、この選手達のほとんどが鎌倉学園に進んだ。

その1人、一戸隆男君が、昭和41年(1966)8月、全国高校総体の青森大会、個人重量級で日本一と

なった。

翌年、安齋悦雄氏を慕い、拓殖大学に進んだが、その年、拓大は、カナダのロジャースの1点を死守して、全日本学生柔道優勝大会に初優勝した。

この、安齋・一戸両選手の「鎌倉コンビ」は、拓大卒業後も、全日本柔道選手権大会に3度、4度出場し、昭和49、50年度には、揃ってアベック出場した。

特に、昭和49年には安齋選手がベスト8に進み、鎌倉の柔道を天下に示した。安齋氏はその後長年静岡県警の主席師範を務めた。

鎌倉柔道倶楽部は、神奈川県警察の井上春男師範が指導(当時)、創始者春藤春光氏と警察柔道、師範学校や鎌倉中学の柔道が、横浜国大や鎌倉学園へと受け継がれ、市内中学校の約半数に、柔道部が設立されている現状との結びつきが、以上で明らかになったであろう。

昭和30年(1955)の第10回国体で、柔道競技が鎌倉を会場として開催されたのも、歴史をひもとけば、当然であるとの印象が深い。

昭和51年(1976)2月大船中学は塩見眞彦先生と的場保幸先輩の協力態勢による指導で、第9回県中学校柔道大会(新人戦)に、圧倒的な強さで、6年振り2度目の優勝を果たした。(選手:林香、野沢清彦、花沢康、小島光晴、森義弘)

この選手達から、花沢康と野沢清彦君が藤嶺藤



沢高校に進んだ。花沢君は典型的な先鋒型。野沢君は、理想的な大将タイプ。

神奈川県では、東海大付属相模高校と桐蔭学園高校が頭抜けており、常に、全国的なレベルにあった。今もこの状態は続いている。

昭和54年(1979)、関東大会で、東海大相模、桐蔭高校とともに、ベスト8を勝ち上がって、全国大会出場権を得た藤嶺藤沢高校は、トーナメントの山にも恵まれていたとはいえ、この大会で、なんと、ベスト8にまで勝ち上がったのである。

この時、東海大相模も桐蔭もその前に、強豪に敗れて消えてしまっていた。

藤嶺藤沢高校監督の二挺木幸雄先生をして「お陰で、いい想いをさせてもらいました。」と言わしめた夏であった。

昭和56年(1981)11月、神奈川県柔道道場連盟創立30周年記念柔道大会〔川崎大会〕が開催された。宮地道場が参加し、以下のように好成績を収めたのだが、…特に個人戦では…。

(小学6年)橋本剛治、(中学2年)野沢忠志、(中学3年)野沢浩二、…と(個人戦)の優勝をほぼ半数さらい、(団体戦)ははっきり頂きと思っていたのが、川崎勢の猛攻に遭い、惜しくも準優勝となってしまった。

先鋒(小5)田代弘毅、次鋒(小6)橋本剛治  
中堅(中1)坂本 勉、副将(中2)野沢忠志  
大将(中3)野沢浩二

メンバーからは考えられない結果となった。

そして、8年後の、平成元年(1989)7月のこと、宮地道場、玉縄中学、藤嶺藤沢高校、秋田経済法科大学(2年)へ進んだ橋本剛治選手と、一方、宮地道場、岩瀬中学、藤沢高校、富士大学(1年)へ進んだ田代弘毅選手が〔第6回正力松太郎杯・東北地区大会(65kg)級決勝〕に進出した。優劣つけ難く、審判規定にはない異例の延長戦となり、それも僅差判定。橋本選手が優勝となった。ともに日本武道館に進み、2回戦まで勝ち上がった。(東北地区は、各階級2名が本大会へ出場)

平成7年(1995)夏の県大会55kg級で玉縄中学の幅崎明一君が優勝し、全国(茨城)大会、関東(栃

木)大会に出場、78kg超級で、玉縄中の長澤正継君が3位に入賞し、関東大会出場を果たした。

翌年春の新人戦(団体)で、玉縄中学はベスト4、第3位。鎌倉勢は、久々にトロフィーを受けた。この勢いは引き継がれた。

平成8年(1996)夏の県大会では、55kg級で、玉縄中学の小野隼秀君が優勝。78kg級で、岩瀬中学の佐々木繁君が優勝。それぞれの顧問の相田良一先生と山田隆敏先生が全国大会(岐阜大会)と関東大会(千葉大会)に仲良く付き添った。

横浜、川崎、横須賀、相模原、と柔道人口に恵まれた大都市を有する本県で、県民総体でベスト4に入ることは至難の技だが、昭和41年(1966)秋、勝島好夫監督の時、初めて3位に入賞した。

以後、平成8年、相田良一監督の時に、30年振りの3位となった。

それが、平成12年(2000)、13年(2001)と続けて3位に入賞し、「鎌倉強し。」「17万人に満たない小さな市が、…」と言わしめた。

従来は、県民総体に備えて、大会が近づくと、「にわか合同稽古」を行っていたが、平成5年(1987)から、石井裕二、石川哲也選手の要請を受け、塩見眞彦先生や蒲谷謙先生が音頭をとって、鎌倉武道館で定期的に稽古を始めたもの。

以来、塩見眞彦(柔道協会理事長)、石川哲也(常任理事)、金子吉郎(常任理事)らが中心になり、組織的にこの練習会をまとめ、「錬成会」と呼んでいる。

これを、吉田元久副会長が、小林速人師範を迎えて、稽古は質量ともに高まった。

ここ数年、市教育委員会の委託事業〔国体選手養成教室〕として開催し、更に熱の籠もった稽古となり、素晴らしい成果を挙げている。(後述)

当初は、武道館に集まる者も少なく、柔道場が広く感じたものだが、最近では、大勢の修行者で、手狭になってしまった。

大きい者と小さい者とがぶつかり、危険なので、倉庫に仕舞ってある、あと半分の畳を、その都度、出して敷き、終わると仕舞う、この手間と時間が、実に勿体ない。畳の傷みも進む。





[写真]

第68回鶴岡八幡宮奉納柔道大会の時のもの(80周年記念大会)。この日、80年前作成のボロボロの錦の優勝旗が渡邊道場から返還された。「戦争のための中断が12年間」と知れる貴重な資料である。

「柔道場本来の形(2試合場)で使いたい。」という声は、なかなか理解されない。

鎌倉武道館は「なぎなた競技」のために用意されたために、柔道場も畳を敷かない形で利用することが必要な時期が、確かにあった。

蒲谷謙選手は(大船中、鎌倉学園卒)拓殖大学在学中の昭和48、49年度、東京都学生柔道連盟並びに全日本学生柔道連盟の会計、委員長として活躍し、大学柔道のために貢献した。鎌倉学園の齋藤次郎師範はこれを大変に喜び、「こんな名誉なことはありません。柔道の選手はたくさんいるが、学連の委員長は日本でたったの一人です。鎌倉学園の卒業生が、今後、全日本学生柔道連盟の委員長になることがあるかどうか、…」と。

もう一人変わり種を…、大船中卒、柏陽高校に進んだ安田俊英選手は、高校に柔道部がないため、宮地道場・齋藤次郎師範のもとで、小学生の指導を兼ねて修行した。(昭和48年(1973)~51年)

高校卒業後、志を立て、フランスのサボワ大学に進学後も、現地の柔道場に通い、修行を続けた。フランス柔道界のレベルは高く、軽量級は人数も多く、強いのも多い。昭和53年(1978)国内大会に出場、第3位、翌年は準優勝と、大いに名を挙げた。

平成13年(2001)8月、藤沢市立藤ヶ岡中学校(武道場)で、藤沢市の中学校体育教師を対象に柔道指導者講習会が、県教育庁湘南三浦教育事務所主催で開催された。指導者は(六段)田代弘隆。指導協力者は、塩見眞彦(五段)、山田隆敏(四段)、神崎芳郎(四段)相田良一(四段)等。

大船中の大谷昇(初段)(3年)と佐藤昂史(初段)(2年)を助手に依頼し、好評を得たことを付記したい。

今年の優秀選手賞、優秀団体賞を紹介すると、吉田元久五段が第23回全日本医師柔道優勝大会(60歳代前期の部)で優勝。金子吉郎(三段)が第50回全国青年大会無差別級で第3位。鎌倉柔道協会チームが第68回鶴岡八幡宮奉納柔道大会で優勝、(先鋒伊藤裕亮、次鋒浅川大輔、大将金子吉郎)50年記念に花を添えることが出来た。

吉田元久五段は第24回全日本医師柔道優勝大会(60歳代前期の部)では準優勝。「来年こそは」と、闘志を燃やしている。